



国際社会日本

立命館慶祥高等学校3年

ジャレット・ヴァーガスさん

私は、考えすぎるとよく言われます。しかし、それは私に質問させないように防御しているに過ぎません。なぜなら、私がかまわずに質問すると、必ず答えてくれるからです。

この日本滞在期間中、色々なことについて質問してきました。そのことを通して、日本について多くのことを知ることができ、日本人と話す機会が与えられました。しかし、政治や制度などについて議論するとき、「日本は変わらない」とよく耳にします。「なぜ、そのようなことを言うのだろう」と不思議に思っていた私は、調べ、話を聞くにつれ、多くの日本人は日本の未来に対して悲観的だということがだんだん明らかになってきました。日本人は、日本という国が良い方向に前進し、変化するという希望がありません。なぜなら、この国の歴史を振り返ると、日本はずっと変化し続けてきた国だということが分かるからです。

徳川時代の最後まで、日本は世界から閉ざされていました。オランダ、中国とは貿易をしていましたが、それらの貿易は徳川幕府に限られていました。1853年、米海軍のペリー提督が黒船に乗って入国し、開港を迫りました。日本は、自分たちの意思に反して、しぶしぶと開国の一歩を踏み出しました。徳川幕府滅亡後、明治維新と呼ばれる大きな改革が起こり、技術的にも軍事力にとっても有利であると判断した日本政府は、全ての港を開きました。第一の開国が完成しました。それ以来、20年間、日本は工業化に重点をおき、急速に発展してきました。外国の制度や技術を取り入れ、欧米諸国に瞬間に追いつき、強国として世界に現れました。

第二の開国は、次世紀に始まりました。第二次世界大戦後、欧米諸国は日本に対する見方を変えました。テレビやコココーラなどの発明品で欧米文化は日本の

社会に入り込みました。新しく建てられた工場とアメリカからの援助により、日本は政策を立て直し始めました。そのようにして、門戸を開いただけではなく、圧倒的な力を示す国として世界に出ていきました。第二の開国のおかげで日本は繁栄し、世界第二の経済大国になりました。歴史の中で日本は、ただ変化しただけではなく、極めて短期間で経済的に発展し、繁栄するために変化した国でした。日本は、世界全土に門戸を開いたのです。しかし、再び経済的に発展し、繁栄するため、「第三の開国」が必要だと思います。

「第三の開国」を行うために日本の中に、もうひとつ、変化が必要です。これまでと同じ日本であるならば変化が可能です。今までは、変化をして、繁栄してきました。ですから、これからも変化をして繁栄することができると思っています。キーワードは、内なる変化です。政治、制度、生活の変化です。日本は、再び世界の頂点に到達しなければなりません。そして、今度は、圧倒的な力を示す国としてだけでなく、正義と平和の理想を広げる行動をする力を示す国として、世界に出ていかなければなりません。それは、国際的な問題に対して、より大きな役割を果たすということにほかなりません。財政面での援助だけではなく、行動をも伴う援助をするということです。誰も行動しないときでも、力がある日本は率先して行動すべきです。世界第二位のGDPを誇る日本は、必要なときに行動する力があります。

私は、日本には、世界に対する責任があると信じています。「開国」は、国だけではなく、その国の民族をも含みます。国民が国際化を受け入れる準備ができる社会を作る必要があります。そのために、日本国民に対して、他の文化に触れ、外国人とコミュニケーションし、協力する機会を与える必要があります。適切な教育と外国人との接触が増加することにより、このことが可能です。

「外国人との接触だけでは簡単すぎる」という人もいますが、外国人との接触を通じて、日本人は異文化を知る機会を与えられます。そのことは、いつか日本人の底力になると思います。異文化を知り、外国人とともに学び、働き、議論し合うことにより、理解し合えるからです。「第三の開国」を完成させるために、そのような変化が必要です。

「第三の開国」は、第一、第二の開国とは異なるので、違う方法で達成しなければなりません。「アジアの宝石」と呼ばれるシンガポールを見ると、日本と同じように開国により繁栄してきたことが分かります。しかし、日本と違う点は、シンガポールの開国は強制されたものではなく、シンガポール自体が望み、決断し、完全に自国の力で勝ち取った開国であったことです。マレーシアから独立したばかりの時期は、対処しなければならない問題が山積していました。上昇していた失業率と悪化していた生活水準により、シンガポールの未来は、暗澹していました。マレーシアと再統一をすると、インドネシアに侵略されると恐怖心を抱いていたシンガポールは、1965年9月21日、国連に参加しました。ついに、開国の第一歩を踏み出したのです。それ以来、インフラを整備し、教育に力を注ぎました。国土も狭く、天然資源がないシンガポールは、人材を育てることを最優先しました。その結果、生活水準は良くなりましたが、より経済的に発展するため、工業化するために、他国との貿易、ビジネスを始めました。ビジネスフレンドリーという環境を作り、精巧な商品を輸出し始めました。そして、急速に金融大国となりました。これがシンガポールにとっての「開国」でした。たった40年間で、シンガポールは、開発途上国から先進国の一つに躍り出たのです。

日本は、シンガポールの開国から何を取り入れることができるでしょうか。一つには、開国方法ではないでしょうか。主要なポイントは、シンガポールが開国しようとしたとき、外国人と楽に協力できる地盤がもうすでにできていたということがあげられます。シンガポールは、中国人、インド人、マレー人、ユーラシア人を含む多民族

国家です。「人種の坩堝」と呼ばれているこの国は、互いに影響し合い、融合してきました。ビジネスの面からも多民族が協力し合うという基礎ができていたと言えます。もう一つは、言語です。シンガポールには、英語、中国語を含めて、4つの公用語があります。国際言語として使える公用語のおかげで、外国人にとって協力、コミュニケーションがとりやすく、その結果ビジネスもしやすくなりました。この他にも要因はありますが、日本の開国にとって、この二つが重要だと思います。私は、日本も「第三の開国」を成功させるために、この二つを取り入れるべきだと思います。

「第三の開国」は、日本国民全体の努力を要します。特に若い人々は、国際化における世界の架け橋になるという役割を担うためにも、最も重要な立場にあると思います。なぜなら彼らこそ、日ごろから日本の生活や社会、文化に多様な異文化を取り入れているからです。そして、いつの日か日本を背負い、日本の未来を決める人々です。彼ら新時代の日本人が、国際化に対する準備をするために、日本政府は、若者を積極的に国際社会に参加させる機会を与える必要があると思います。それは、新しいプログラムを作ること、もしくは既存のプログラムにもっと自由に簡単に参加できる仕組みを作ることです。現代の社会は、義務教育後、高校、大学と社会が作った線路の上を走っていれば成功できると言わんばかりに、決められたルールの上を歩くことを要求します。しかし、若いうちに、国際感覚を養うこと、世界を見ること、国際社会に参加することも一つの選択肢であると政府が奨励すれば、海外で活躍できる若者、世界との架け橋になれる若者が増えると思います。

例えば、留学です。留学は、言語を学び、外国の生活を経験するプログラムであることは誰でも知っています。ですが、留学だけが異文化を体験できるプログラムではありません。発展途上国でボランティア活動をするなど、机の上での勉強では学ぶことができない強い精神、自立を、身をもって知るプログラムを政府や学校が奨励したらどうでしょうか。また、留学するだけでなく、外国か

らの留学生をより多く日本に受け入れることを通じて、国際感覚を養うことができます。外国人と議論し、お互いに良い影響を与え合う機会が日本人に必要なと私は思います。受け入れプログラムを増やすだけでも、日本は「第三の開国」により近づくことができると思います。日本政府や学校は、若者に魅力的なプログラムを提供し、推薦すべきです。外国について学んだり、新しい食べ物を試してみたり、また、日本以外の全ての世界を見るように奨励するという事です。そのことにより、新時代の日本人は目覚めてくると思います。そのときにこそ、日本は国際化に向けて大きな一歩を踏み出す準備ができ、国際化、「第三の開国」が自ずと始まるでしょう。

次に、外国語教育です。現在の英語教育で、日本人は、文法、語彙等をしっかりと学んでいます。しかし、学んだ英語を使うことができません。中学、高校での6年間で、少なくとも日常会話程度は難なく話せることを目標に、英会話を取り入れたらよいのではないかと思います。小学校から英語のフレーズを教えるよりも、中高で外国人講師による英会話指導を徹底した方が、はるかに早く会話ができるようになると思います。なぜなら私自身、来日時はまったく日本語が話せませんでした。日本語の語彙テスト、文法テストを定期的にしたおかげで、体系的に日本語を学び、学んだ日本語が楽に使えるようになったからです。来日から4カ月後、日常会話にも慣れ、帰国時には自分でも驚くほど流暢に話せるようになっていたからです。この10カ月留学プログラムのおかげです。日本が好きになり、日本で働きたいと思いい、現在、再び日本で学んでいます。

最後に、日本にいる外国人の役割について述べます。留学生である私たちは、日本人の手助けにより、もうすでに異文化を体験し、国際感覚を養ってきました。これら準備してきたことを用いて、日本の開国の成功を手助けすることができます。私たちは、日本にいる間にできるだけたくさんの人と議論し、友達を作ることにより、考え方、文化の違いを示すことができます。「もうすでにしている」という人もいます。しかし、し続けることによ

り、日本人個人の見方が変えられるのです。日本人の友達を一人作ることにより、その人に国際感覚を養う機会を与えることになるのです。その人の将来にとって、良い影響を与えることができます。人と付き合うだけで、議論するだけで、私たちは異文化を示し、少しでも国際感覚を養う機会を与えることができます。日本滞在期間中に、留学生同士だけではなく、日本人に異文化を示し、できるだけ多くの友達と議論してほしいと思います。それは、日本の国にとって大きな力になります。私自身は受験生ですが、できるだけ多くの人と議論し、付き合うようにしています。そして、その友達が他の外国人と上手に影響し合えれば、議論し合えればいいと思っています。そうなれば、私たちは、友情だけではなく、異文化も示すことができたと分かります。私はいつか、日本の開国に向けて、もっと積極的に役割を果たしたいと願っています。日本の社会に出て、他国との架け橋としてのビジネスをし、チームをリードしたいと願っています。日本の良い点と外国のスタイルとを併合させると、どれだけ日本が上手に動けるかということを証明したいと思っています。日本の未来を信じているからです。

私は、日本がどのような障害でも乗り越え、「第三の開国」を成功させる力があることを信じています。19世紀に全ての障害を乗り越え、アジア最初の工業国となった同じ日本を信じています。20世紀に戦争で破壊された国から、世界第二の経済大国になった日本を信じています。日本は今まで、勤勉さを武器に、どんな障害でも乗り越えて成功してきました。再び、新たなチャレンジに取り組み、繁栄できる国であることを信じています。「第三の開国」です。簡単なことではありませんが、日本ならできます。日本の国民なら、日本を「変える」ことができます。「第三の開国」後には、新しい「国際社会日本」が生まれているでしょう。やはり、私は、考えすぎているでしょうか。